守る強さ

SERARU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
守る強さ

【Ｎコード】
Ｎ６８２５Ｋ

【作者名】
ＳＥＲＡＲＵ

【あらすじ】
あの時死んでしまったはずなのに。
現実とは違う世界に来てしまったシュンは全ての記憶をなくし、そこで出会ったアスベルたちと旅をすることになった。
その旅の中で彼らは何を得るのか。

「キィィィィッ！！」
車のキューブレーキの音が俺のすぐ横で響いた。そしてドンッと鈍い音ガ聞こえた。
俺は痛みを感じる間のなく、その場から数メートルほど飛ばされ気を失った。

――――――・・・俺、ここで、こんなカタチで死ぬのか・・・・――――――

気を失う直前そう思った、ひどく時が遅く感じる。死を覚悟した。

――――・・・ソンナ・・・サセナイ・・・生キル・・・！――――――

そんな幻聴さえ聞こえてきた。

・
・
・

「う、うわぁ？！　兄さん！まだここに　もう一人、人が！」
「おい！お前！どうしてこんなトコロで寝ているんだ？」
その声で俺は目を覚ました。声のしたほうを見ると2人の少年と1人の少女が俺を不思議そうに見ている。少年達は俺が起き上がったことに驚いていたが、少女の方は特に驚く様子もなく、きょとんとした顔をしている。
「こ、こんなトコロで寝ていたら危ないだろ、寝るんなら家に帰ってからの方がいいと思うぜ？」
俺はただ、混乱していてその少年の言葉に返事することもできなか

った。

――どうしてだ？確かに俺はあの時死んだはずなのに？

――

ふと、辺りを見渡す。どうやら俺は花畑の中、眠っていたようだ。

「おい、お前名前は？」

俺が黙っていると少年の一人が問いかけてきた。

――俺の、名前？　思い・・・出せない　俺はいったい誰、なんだ？――

死ぬまでの記憶はある、それなのに自分の名前だけがすっぽりと抜けている。

それどころかその死ぬ前の記憶すら消えていっているような気がする。

考えれば考えるほど、記憶が剥がれ落ちていく。

俺はまた少年の質問に答えることはできなかった。

「あ、そっか。こーいう時は自分から名乗るんだっけ。」

少年はポンと手をたたき、自ら自己紹介をはじめた。

「俺はアスベル・ラント！　んで、こっちが弟のヒューバートだ。」

「よ、よろしく・・・。」

ヒューバートと呼ばれた少年が恥ずかしいのか、ぎこちなくあいさつしてくれた。

「その女の子は？」

今度はこっちから質問してみた。するとアルベルは困った顔で

「こいつ、記憶が無いらしいんだ。行くところも無いみたいだし今からオレの家まで連れて行くことにしたんだ。」

と、説明してくれた。

「んで、お前の名前は？」

「・・・・。」
「もしかして・・・君も記憶喪失なの？」
静かにしていたヒューバートが問いかけてくる。
「そう、らしい・・・・。」

「なら、お前も、オレたちと来いよ！」
しばらくの沈黙のあと、アスベルが口を開いた。この言葉には俺もヒューバートも驚いた。
ただ一人少女を除いて、だが。

「いいの、か？　一緒に行っても？」
「あぁ。構わないぜ！」
「兄さん！本当に大丈夫なの？お父さん、きっと怒るよ？」
「まぁ、なんとかなるだろ。さ、早く行こうぜ！」
そう言うとアスベルはさっさと歩き出した。残った俺たちも後に続いた。

「うわ！なんだコイツ！」
道中、魔物に出くわした。こんな奴、俺は見たことが無い。
「知らないのか？モンスターだよ。一回くらい見たことあるだろ？」
俺は首を横に振る。
「この世界には、モンスターがいないところなんて無いと思ってたのに違うのかな。」
「まぁ、いいや！さっさと倒して街へ行こう！」
武器を持たない俺は街につくまで守ってもらうことになってしまった。
ムカつくけれど仕方が無い。

「到ちゃ～く！　ココが、オレとヒューバートの街だ！どうだ？すっげーだろ！」
　さっきから、アスベルが一人ではしゃいでいる。
「ここが、ボクたちの家がある〔ラント〕だよ。ボクらのお父さんはラントで一番偉い人で、領主って呼ばれてるんだ。」
　周りを見ると、風車が二つあって、人も多くて賑やかで平和なカンジだ。

「どうだ？お前ら、街の様子を見て何か思い出したか？」
「よく、わからない・・・。」
「俺も、思い出すことは無いかな。」
「そうかぁ、どうしようか・・・。」
「アスベルっ！！！」
振り向くと少女が１人、怒った顔でアスベルを睨んでいる。

「うげ・・・シェリアだ・・・。」
「シェリア？」
アスベルはとてつもなく嫌そうな顔だ。

「今からそっち行くからそこから動かないで！」
そう言ってシェリアがこっちに走ってこようとした。
「ケホッ！　ケホケホッ・・・！」
数歩走ったところで苦しそうに咳き込み、その場で止まってしまった。
「シェリア！　急に走るから・・・。」
心配そうに言いながらアスベルが駆け寄る。続いて俺やヒューバートが駆け寄る。

「はぁ・・はぁ・・あなた達、あそこへ行ったんでしょう？」
「あ、あぁ、あそこって？」

「とぼけないで！！街の裏山にある一年中花が咲いてる場所よ！」

――あそこって一年中花だらけなのか・・・――

「行く時は私も一緒ってあれほど約束したのに・・・。」
「そんな事言ったって、お前、絶対途中で歩けなくなるだろ？そうなったらどうせオレがおんぶするハメになるんだ。」
「それで言うんだよね、おんぶされるのはイヤー！って。」
ヒューバートが付け加える。
「そ、それはアスベルのおんぶが下手だかｒ・・ケホケホッ！」
「あーもうしょうがないなぁ・・・ホラ。」
アスベルがシェリアに背を向けてしゃがむ。
「い、いいわよ！一人で歩ける！／／／」
少し頬を赤らめながら拒否した。

「ところで兄さん、あの子は？」
「あの子？それにこの子も・・・」
そういいながらシェリアは俺を見る。記憶が消えている俺は当然、何も答えることもできず、シェリアから目をそらした。
「あ、まだあんなところに・・・ヒューバート、つれてきてくれ。」
「うん・・・。」
少女はまだ街の入口に立っていた。
「お前、どうしてこっちに来ないんだ？」
「・・・動くなって聞こえた。」
「それは別に、動いてもいいんだぞ？」
我慢でいなくて自分で言ってみた。
「そうなの？」

「この子、誰？」
シェリアが少女に近づき、ジロジロと見つめる。

「花畑にいたからつれてきたんだ・・・ってそんなに睨むなよ。女同士仲良くしてやってくれ。」
「ムー・・・ところでアスベル手に持ってるその花は？」
「え？あ、こ、これ？」
シェリアアスベルに近づく。
「わー・・・きれい、もしかしてこれ、私に？」
「あ、いやその・・・」
「そういうことにしておこうよ、シェリアの機嫌もなおるし。」
アスベルがオロオロしているとヒューバートがアスベルにささやいた。
「あ、まぁそんなところだ。」
花がアスベルの手からシェリアに渡される。
「わぁ・・・クロソフィの花ね。こんな季節に咲いているなんてやっぱりあのうわさは本当だったのね。・・いいわ。この花に免じて今回のことは許してあげる。」
アスベルもヒューバートもホッとした顔だ。
「それにしてもこの二人どうしよう・・・。」
「・・・それなら私のおじいちゃんに聞いてみるのがいいと思うわ。この街の人のことなら大抵知ってるはずだから。」
「そうだなフレデリックに聞いてみよう。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6825k/

守る強さ

2010年10月28日08時13分発行